

Title	土佐光信の文芸活動 : 陽明文庫蔵「三十首」歌と連 歌
Author(s)	岩崎, 佳枝
Citation	語文. 1986, 47, p. 34-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68745
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 土佐光信の文芸活 動

# -陽明文庫蔵「三十首」歌と連歌

### හ

図や、歌合に諸種の職人絵が配された「七十一番職人歌合絵」など、 時の公卿日記等に記され、肖像画家として、また「北野天神縁起絵 の貴紳たちとの交流の中にあって、文芸活動ことに連歌活動を盛に いわゆる風俗画と呼ばれるものも光信の作品と推測されている。 る。記録には見えないものの、旧町田家本「洛中洛外図屛風」の原 や「清水寺縁起絵」など絵巻制作者としての輝かしい足 跡 も 伺 え 明応五年(一四九六)には刑部大輔となる。彼の偉大な画業績は当 四六九)右近将監絵所預に補任、延徳二年(一四九〇)刑部少輔。 土佐派を代表する室町後期の大和絵作家土佐光信は、文明元年(一 方土佐光信は、甘露寺元長・三条西実隆・中御門宣胤など当時

絵師光信の唯一の和歌資料といえよう。

新図供養「三十首」歌には奇しくも光信の名前が見えるのである。 なる。また両記録の中程延徳三年(一四九一)三月二十四日の人麿(5)(一五二五)九月二十一日、近衛稙家等との連歌会が最後の 記 録と (一四六五) 十二月十四日の連歌会に見出され、六十年後の大永五年 年間とされている。確かに公卿日記の記録の上ではそうであろう。 しかし光信の名前は、管見に入るところでは、すでに 寛正 六年 枝

づけたいと思うものである。 歌連歌作品を浮上させ、彼の文芸活動を和歌史・連歌史の上に位置 ともに、これまで問題にされることのなかった奥絵師土佐光信の和 時をも大きく更新させるものである。本稿ではそれら新資料紹介と 内容を明らかにしてくれるとともに、彼の文芸活動期間および没年 これらの資料は従来知られることのなかった光信の和歌・連歌の

### 1

七月二十五日の『二水記』の記載をもってその下限としている。つ五一三)四月八日の条が最初であるとされ、永正十七年(一五二〇) である。光信研究では、彼の文芸活動は『元長卿記』永正十年(一 行っている。その記録は当時の月次連歌会などに屢々見出せるもの

まり光信の文芸活動は永正年間、それも十年から十七年までの約七

が見える。

『実隆公記』延徳三年(一四九一)三月二十四日の条に次の記載

岩 临 佳 web公開に際し、画像は省略しました

押定家卿自筆色紙[山鳥ノオノ歌] 供養州首歌講之、来会之象中御門新少輔光信書之、本信実真跡也、讃 供養州首歌講之、来会之象中御門新 廿四日夷天晴、早朝向宗祇庵、 予、発声中納言入道、 大納言、下官、 姉小路前宰相、稚俊朝臣、其外数輩在之、講師行二、読師 滋野井中納言、中納言入道、題者、冷泉前中納 泉八道講之披講了、蓋斎食、々々以後数盃中納言歌冷披講了、蓋斎食、々々以後数盃 是兼日招引也、人丸像新図 土佐

続いて

頗酩酊帰宅。

廿五日光 天晴、〈略〉宗祇法師称昨日礼来。

に三十首を講じたのである。割書によると、もと信実描くところの とある。実隆らは延徳三年三月二十四日宗祇庵での人丸像新図供養 人丸像を今回新しく土佐刑部少輔光信に模写させ、讃には定家の自

筆色紙

(山鳥ノ尾ノ歌)を押すとある。

魔供養歌会も盛んであった。ことに宗祇庵での人麿像新図供養は特ものを嚆矢とされるが、中世後期においても影供歌会が流行し、人見られる元永元年(一一一八)六月十六日藤原顕季邸で開催された 筆すべきものであったのか、実隆はこの日の模様を詳しく記してい もしばしば催されていたようである。人麿影供は「柿本影供記」に 次歌会・月次連歌はほぼ毎月、また春日・水舞瀬法楽など法楽歌会 延徳・明応の頃は歌壇も昂揚期・隆盛期とはいえないものの、

関係では「土佐派年譜」にも紹介されている。しかし『公記』によ 期』に両角倉一氏も『宗祇連歌の研究』において言及され、美術史 な歌であったのか、残りの詠者たちは如何なる人々であったのか。 って詠者の一部は判明しているものの、披講された三十首とはどん 当記録はすでに井上宗雄氏も注目し『中世歌壇史の研究 室町後 たのである。

ろの「人丸像新図供養三十首歌」(仮題)である。(写真A) 楮紙、未表装仮巻の状態で保存され、巻末に「延徳三年三月二十四 日於種玉庵一座」とある。紛らべくもなく『実隆公記』に記すとこ 歌題・詠者はそれぞれ一行に記され歌数は全三十首、用紙は薄手の 全長一〇五・五糎、裏面左端上部に「三十首」と墨書されている。 陽明文庫(所架番号七七五七一)に蔵されていて、縦二八・五糎、

「三十首」は次のごとくである(便宜上全歌に一連番号⑴から30

を施す)。

①あかねさす日のたて貫にをる衣をのれそめいたす春霞哉 二楽軒宋世

(2)けふいくか空とちはてゝ五月雨のはれま雲まも見えぬ比哉 夏天象 松木殿宗綱 三条殿西 實降

(3)あさ霧のあはれそ遠くのこりける月にあかしの名をはとめても 滋井殿教国

冬天象

(4)まかへ見し落葉の霜も有明の空も日影にたへぬ色かな 冷泉殿政為

姉小路殿基綱

(5)いくめくりあはてふる身の一とせをまもれる星も空にことはれ

(6)底ふかきいはみの海を硯にてかくともつきし春の気色は

**⑺夏かけてなかめし藤の花の色はなを世ににほふたこの浦波** 飛鳥井殿雅俊

(8)これも世の心/~よしつかなる月はたか津の秋の岩波 夢庵肖柏

36

実際の作品は今日まで明かにされていなかった。実はこの三十首は

恋〃〃 光信土左刑部大輔 光信土左刑部大輔 (3) 凹ねやのうちに風ふきとをせけふの日のあつさわるゝ枕たにせん **伽色〃に世や春ならし山ふかみ霞はかりの宿のひかりを高** 間まきひはらみとりに染て冬かれの梢をよそにふる時雨哉 1個吹からにやまとにはあらぬくれなゐやもろこしよりの木~の秋 凹ひまもなき池のはちす葉玉ちりて水に雨聞音の涼しさ 個花なれや夕を色にきえやらて嵐にかゝる山のはの雲 **⑮此くれと契をきてし槙の戸にこゝろさはかす松風の声** 個秋ふかきやとにそうかふ此ころのあかつきつゆにいにしへの空 凹らきにのみなかるゝちよを一夜川袖にせめてのしからみもかな (9)あかしかた明ゆく雪にほの/~と嶋見えそむる波のうへかな 姉小路殿 秀興結城三郎 宗功寺井伯耆入道 盛郷波、伯部兵庫助 種玉宗祗 **ぬかへるへき空と見るらしあはれそふ雪の夕をあまのつり舟下** 図よしの山桜を雲と見し人も秋のあはれや猶おもひけん 図おさまれる世の春なれやことわさのふるきをうつす風の姿は 20深ぬまの嵐の程は中/~に月よりさひしをしの鳴声 図ねにそなくこよひいつくの遠妻に手枕かへて鹿のふす覧 20ほとゝきす我しのひ音を忘れてやたれもねぬ夜の月になくらん **21おちくるもあかるも見えす夕ひはりふかき霞の野へに鳴也** 30しるしなき御祓もさそなおもひあるわかみなかみのうけぬ物と 切宿ことにふくてもかくやたゆからんかるもひまなき沼のあやめ 秋/// 恋"" 延徳三年三月廿四日於種玉庵一座 夏〃〃 冷泉殿 行二 二楽軒 三条西殿

詠者は二楽軒宋世・松木宗綱・三条西実隆・滋野井教国・冷泉政

20我にうき人のむかしやわすれ草たねとりそめし今のためとて

十九名である。『実隆公記』には来会の衆として公卿歌人(中御門 階堂判官入道)・種玉宗祇・宗柏・盛郷(波々伯部兵庫助)・秀興(結 為・姉小敢基綱・飛鳥井雅俊等公卿歌人七名、夢庵肖柏・行二(二 新大納言(宗綱)・下官(実隆)・滋野井中納言(教国)・中 納 言 入 道 宗益・正純等連歌師・武家歌人・法体歌人、それに絵師が加わり計 城三郎)・光信(土佐刑部少輔)・宗功(寺井伯耆入道)・玄清・宗作 (雅康)・冷泉前中納言(政為)・姉小路前宰相(基綱)・雅俊朝臣) 七

泉政為が次点に、下点は夢庵肖柏の詠歌となる。 庵での影供を考慮したためか宗祇となり、飛鳥井雅俊・二楽軒・冷 家歌人入道行二も二首、後の詠者は各一首ずつである。高点は種玉 詠じ、他の公卿は各二首、連歌師では肖柏・宗祇のみが各二首、武 鳥井家の長老雅康の詠歌で始まり実隆の歌で終る。雅康のみが三首 夏・秋・冬・恋を冠した部位となり三十題である。「三十首」は飛

(3)あさ霧のあはれそ遠くのこりける月にあかしの名をはとめても 次に「三十首」より人麿に因むと思われる歌を挙げよう。 (実隆)

⑥底ふかきいはみの海を硯にてかくともつきし春の気色は (基綱)

(7)夏かけてなかめし藤の花の色はなを世ににほふたこの浦波 (雅俊)

(9)あかしかた明ゆく雪にほの/くと嶋見えそむる波のうへかな

間秋ふかきやとにそうかふ此ころのあかつきつゆにいにしへの空

28よしの山桜を雲と見し人も秋のあはれや猶おもひけん

伝人麿その他人麿に因んだものと思われる。参考までに典拠と推測 右の六首は万葉集・古今和歌集・拾遺和歌集等に見える人麿歌・ (政為)

2

されるものを補注に掲げておく。

名のみ記され、あとの詠者名は「其外数輩」として省略 されて い

る。詠題は天象・地儀・居所・植物・動物・人事のそれぞれに春・

あろうか。 ろうか。そもそも如何なる和歌活動・文芸活動を展開していたので ることといわねばならない。彼らは如何なる歌を詠じていたのであ の両者が同席して、しかも連歌ならぬ和歌を詠じあったのは興味あ り、連歌界・画壇という異なった世界で活躍していた人である。そ 祇と土佐光信である。両人は今回の御影供の実質上の主 人 公 で あ 録されていない。他も同様であろう。ここで特に注目したいのは宗 天象」(いくめくり)、「秋人事」(よしの山)の歌も『碧玉集』に記 にしても『再昌草』『雪玉集』には収められていず、冷泉政為の「恋 条西実隆の「秋天象」(あさ霧の)、「恋人事」(しるしなき)の歌 歌が見える。しかも従来知られていなかった作品が殆どである。三 陽明文庫蔵「三十首」には延徳・明応期の代表的な歌人たちの詠

⑮(恋居所)此くれと契をきてし槙の戸にこゝろさはかす松風の 延徳三年三月二十四日、種玉庵における土佐光信の歌は

歌については別稿に譲り、本稿では光信の和歌・連歌活動を中心に 右の一首である。彼の詠風等については後述する。また宗祇の供養

述べる。

文明元年に右近将監・絵所預に任じられた大和絵代表作家土佐光文明元年に右近将監・絵所預に任じられた大和絵代表作家土佐光でのなかった光信の連歌活動についても触れ、次のように記してととのなかった光信の連歌活動についても触れ、次のように記してとのなかった光信の連歌活動についても触れ、次のように記してとのなかった光信の連歌活動についても触れ、次のように記してとのなかった光信の連歌活動についても触れ、次のように記してことのなかった光信の連歌活動についても触れ、次のように記している。

永正十五年(一五一八)七月の二十日、四条隆永亭で月次連永正十五年(一五一八)七月の二十日、四条隆永亭で月次連なった。中御門宜胤・宣秀父子、甘露寺元長、広橋守光、勧修なった。中御門宜胤・宣秀父子、甘露寺元長、広橋守光、勧修なった。中御門宜胤・宣秀父子、甘露寺元長、広橋守光、勧修ないが当時第一の連歌の上手といわれた玄清の姿もみえる。明御門宜胤はこの日の日記に、

初とされるのである。

と連歌師光信の発句を書きとめている。 蝶の行園生や花の秋の草 光信朝臣

た彼の遊芸三昧の生活であった。その連歌を介して、三条西実の月次会、二十五日の山科言綱亭での月次連歌会に彼は定衆の月次会、二十五日の山科言綱亭での月次連歌会に彼は定衆のの月次会、二十五日の山科言綱亭での月次連歌会に彼は定衆のの月次会、二十五日の山科言綱亭での月次連歌会に彼は定衆のの月次会、二十五日の山科言綱亭での月次連歌会に彼は定衆のの月次会、二十五日の山科言綱亭での月次連歌会に彼は定衆の月次会、二十五日の山科言綱亭での月次連歌会に彼は定衆のの月次会、二十五日の山科古の中御門宣胤らとた彼の遊芸にはいる。

とみることもできるのである。 ら、やがて光信最晩年の「清水寺縁起絵」(図30)が生まれた隆、中御門宣胤、甘露寺元長など当時の縉紳との懇意な交友か

右のごとく、吉田氏は『宣胤卿記』永正十五年七月二十日の条に

大和こと葉の手向いく年光(信)(名す8)通(賢)(名す8)光 信(名す8)光 信(名す8)光 信

### (句上)

具忠五 勝元一句 通賢八 世縁七 心敬十三 行助十一 元説七 宗祇十

専順十三 頼宣六 常安四 光信二

日、年月日は不明ながら文明年間と思われるもの一例、明応年間と月二、享二年卯月二十五日、明応五年八月五日、明応五年八月十五日、明応五年八月十五日、文明十七年三月二、文明十八年三月二十七日、長享二年卯(2) 六日の各連歌会に光信の名が記されている。 (\*\*)、永正十六年十二月十みなされるもの一例、永正四年四月二十七年、永正十六年十二月十

三回の月次連歌に光信の名前が見える。それらはいずれも甘露寺・ 十四年十月から永正十七年七月二十五日までの約二年九箇月、計十 十五日・翌十七年七月二十五日の山科言継邸での月次連歌会では頭 永邸、永正十六年十二月十六日の中御門宣胤邸、永正十六年四月二 信朝臣」「光信朝臣」「土佐光信朝臣」「絵所土左光信朝臣」「土佐刑 中御門・山科等公卿の邸宅で催されている。光信の名前は「絵所光 部大輔」等呼称はさまざまである。永正十五年七月二十日の四条隆 また前記『元長卿記』の他に『宣胤卿記』『二水記』には、永正(3)

> 奥絵師としての地位と名声の一端が伺えよう。 会に移り、定衆の一員として迎えられるのである。土佐派の代表的 での活躍であったのに対し、永正に入ると専ら公卿邸での月次連歌

亭月次会常如土佐頭人也)の記録が最後のものなのであろうか。こ であろう。果して『二水記』永正十七年七月二十五日(午刻向山科 二月十四日の連歌会が最初といえよう。では下限はいつであったの の問題は光信の没年時にもかかわる重要な事項である。 このように光信の連歌活動は、管見に入るところでは寛正六年十

下家伝』には次のごとくある。 (3) 光信の生没年は不明とされる。しかし江戸時代末に著された『地

光信光弘男 右近衛将監 刑部少輔

明応四年正月十八日 叙正五位下四十二歳

明応五年十二月五日 叙従四位下四十六歳 任刑部大輔

明応十年二月九日

年月日

**之ヲモト、ス云々ト、傍ハラ連歌ヲ好ミ宗祇ニ従テ学ブ。大永五年** 術画家詳伝』には「英一蝶曰、ヤマト絵ハ其上土佐刑部大輔光信ノ(%) 後説と大永五年説との二説である。大正七年に刊行された『日本美 正頃の人なり。」とあり、『古画備考』の「土佐家」には「大永五年「刑部大輔光信朝臣〈略〉其卒年詳かならず。 九十余歳といへり。永 没年は天文十二年以降ということになる。また『扶桑名画伝』には 、ズマヒ遣水ノメイホク之初リテ末々ニナガレ、予ガ如キ拙キマデ スサミニ堂上ノウヤ人〜シキヨリ田家ノフツ、カナル様、岩木ノタ 五月廿日光信卒ス、九十二思ひよる日」とある。つまり天文十二年以 これによると、光信は明応四年四十二歳、明応十年には四十八歳

筆を務めていたのである。ただ記録に見える限り、彼の連歌活動は、

の何船百韻には名残のウラ8句目挙句を吟じている。この時既に執 式目をも承知していたらしく、寛正六年(一四六五)十二月十四日 あったと見るべきであろう。連歌師としての技倆は、若くして連歌

文明以前・長享・明応期は主として武家および連歌師サークルの中

役を務め、自ら発句を詠ずるなど光信晩年の連歌活動はより顕著で

web公開に際し、画像は省略しました

(B)「連歌十巻」部分 (大阪天満宮蔵)

いる。 五月廿日歿ス。年九十二」と『古画備考』の大永五年説を踏襲して

のように記しておられる。 肯定するとして、没年については両説とも否定され、その理由を次肯定するとして、没年については両説とも否定され、その理由を次のように記しておりて、(3)

◇略〉これは明らかに誤謬である。それは大永三年十二月には既へ略〉これは明らかに誤謬である。それは大永三年十九日までの間に他行せるものと考へられ、更に簡単に云に人の、一年正月には、既に光信は他界してゐるものとみなければならこともないが、大永二年正月十九日に光茂が父に代つて甘露寺こともないが、大永二年正月十九日に光茂が父に代つて甘露寺こともないが、大永二年正月十九日までの間に他行せるものと考へられ、更に簡単に云いる。
◇略〉まするに光信は永正十八年正月廿二日から翌大永二年正月十九日までの間に他行せるものと考へられ、更に簡単に云いる。

光信はかなりの高齢で没した、と推測するほかはないのである。」とら七月の間か、翌大永二年(一五二二)四月から十二月のあいだに、がれ吉田氏も前述の『日本絵巻物全集5』に「永正十八年の三月か現在土佐派研究において、光信の没年はほぼこの谷氏説が受け継

記されている。

あるが、乙本は発句の作者「梅」の横に朱筆で「近衛稙家公」と記歌十巻」(江戸末期の写 乙本とする)とある。内容はほぼ同じで題に「連歌千二百句」(文化十年八月写 甲本とする)一本は「連る。それは大阪天満宮に蔵されている二本の写本である。一本は表ところが没年はともかく、光信の連歌活動の下限を示す記録があ

永五年五月廿日没説よりさらに四箇月後である。年九月廿一日」とある。じつはこの連歌会に光信の名前が見えるの年九月廿一日」とある。じつはこの連歌会に光信の名前が見えるの年九月廿一日」とある。じつはこの連歌会に光信の名前が見えるのされ、句上が附されている。題は「何人百韻」で、年号は「大永五され、句上が附されている。題は「何人百韻」で、年号は「大永五

いる(写真B参照))。 ようである。(甲本を用いて光信関連句のみ掲げる。句上は乙本を用ようである。(甲本を用いて光信関連句のみ掲げる。句上は乙本を用格(近衛稙家一五〇二~一五六六)の発句で始まる連歌会は次の

# 大永五年九月廿一日

光条光材光親光珠光時宗	さえつるはいつれと聞ん百千鳥(タイヴ1)	物思ふたれ身をかくすらん	ともしひ更る古寺の秋	影細き雲間の峯の有明に	落来る月のかけの涼しさ	ゆく水も氷る斗の朝明に	妹かかきねのよもきふの露	しのひつゝうき中みちの門さして	そことなく袖ふりはゆる誰ならん	松に分入野へのゆく末	紅葉の山の庭の松か枝(鰤)	子状をも隔てぬ菊の籬かな	何人
	光	(保)	光	(材)	光	(親)	光	(珠)	光	時	宗	梅	

(3)文明一七・三・二七 (2) (文正元・四以前) 10明応五・八・ (9)延徳三・三・二四 (8)長享二・四・二五 (7)長享二・四・□□ (5)文明一八・三・二七 仏文明一七・三・□□□ (1)寛正六・一二・一 便宜上上欄に⑴から⒀までの番号を施し、活動年時・賦物・句数 入らない。参考までに、土佐光信の和歌・連歌活動を一覧表に示す。 氏の被官関ロ氏兼等との交流記録以後、光信の連歌活動は管見には (文明年間) 運歌師宗長をはじめ若干二十五歳の近衛家の当主稙家と駿河今川 句 親高六梅十三句 ま (句上) 事項の順に記す。 五 泰以七 材重六 四 / 1469 ハ 保悟と 光信五 宮 1496 1491 1488 1438 1486 1486 1485 1485 (1466) 1465 何路 朝何9 何人12 何船8 何船2 何路5 何路 何路 恋居所1 8 í 宗祗 宗祇 宗祇 賢秀 勝元 政元 宗伊 光信 (大 等 易 力 九 五 連歌会 群類能野法楽千句 連歌会に 連歌会 連歌会 連歌会 も 連歌会 連歌会 立 連歌会 **歌**会養 天満 広大他 陽明 天満他 旧福井 天理 熱田神宮 重阿二 熱田神宮 泰昭六 時茂 相七 (23) 永正一 (19) 永正 (17) 永正 (18) (16) 永正 (15) 永正 25永正一六・六・一 (24) 永正一 22永正一五・六・一六 (21)永正一五・五 200永正一 (14)(3)永正四・四・二七 (13)明応九・七・一一以前492 山明応五・八・ 永正 永正一〇・四・八 一四·閨一○·一六57 五 六. 五・七・二〇二六日延引 四・一二・六 五 四・一一・一六517 五・正・一 ・三・二一 四 四・二六 ゴ・一六 ٠ 五. 六 六 六 1519 1519 1518 1518 1518 1518 1518 1518 1517 1500 1513 1511 1496 (示明) (不明) (不明) 何人 (不明) (不明) 何船 (不明) 片何8 何路 何船 山何 (不明) (不明) Щ 何7 (不明) 広橋 光信 広橋 金吾 宜胤 宣胤 勧黄 兼載 元長 宜胤 言綱 元長 宗祇 月次連歌会 月次連歌会 月次**連歌**会 月次連歌会中御門邸 月次連**歌**会 月次連歌会中御門邸 月次連歌会甘露寺邸 月次連歌会中御門邸 月次連歌会 月次連歌会甘露寺邸 連歌会 於天王寺 月次連歌会 宣胤卿記中御門邸・光信頭役 連歌会 連歌会 月次連歌会 四条邸・光信 宣胤卿記 宣胤卿記 宣胤卿記 宣胤卿記 宣胤卿記 宣胤卿記 宣胤卿記 宣胤卿記 京大他 宣胤卿記 宣胤卿記 天理 元長卿記

図永正一六・一二・一六15 何船 5 宜胤 月次連歌会 国

ぶ永正一六・四・二五 59 (不明)(不明)月次連歌会 二水記山科邸・光信頭役

図氷正一七・七・二五 330 (不明)(不明)月次連歌会 二水記山科邸・光信頭役

ところ知られていない。ちころ知られていない。ところ知られていない。しかし「人麿新図供養三十首」を除き、彼の作品は現在のられる。連歌を嗜んだ光信は、その間当然和歌の詠作も試みたと考えたる。連歌を嗜んだ光信は、その間当然和歌の詠作も試みたと考えたる。連歌を嗜んだ光信は、その間当然和歌の詠作も明らかなように、光信の文芸活動は寛正六年(一四右の表からも明らかなように、光信の文芸活動は寛正六年(一四

松風の声

の和歌は「三十首」中程十五番目にある。 最後に光信の「人麿新図供養三十首」の和歌について述べる。彼

**此くれと契をきてし槙の戸にこゝろさはかす松風の声恋居所** 光信土左刑部大輔

松などに多少垣間見ることはできよう。)じつはこの一首は初句からもそれ程見出せない。(「居所」にまつわる「槙の戸」や「松風」の「恋」の歌のせいか、絵師としての美意識・美的構成といったもの一見、詠風は凡庸で 新鮮 さを 欠き 独創性は感じられない。また

此くれと 続後撰物(此くれと頼めし人はまてどこずは五句目までの語彙はすべて勅撰集にも見出すことができる。

とめてし宿は忘れじ)・新古今・新勅撰・続後契をきてし 後撰?33(千代へむと契置きてし姫松のねざしつかの月のさし昇るまで)・続千載

新古今124(君まつと閨へもいらぬ槙の戸に痛拾遺・(日記)

風雅・新続古・(日記) くなふけそ山の端の月)・新勅撰・続後撰・槙の戸に 新古今四(君まつと閨へもいらぬ槙の戸に痛

さわがす志賀のうら波)・(物語) こころさはかす 後拾遺冠(こひしさも忘れやはする中々に心

続古・新葉たのむる暮の松風の声)・王葉・続後拾遺・新新古今20(いかゞふく身にしむ色の変るかな

歌資料は「人麿像新図供養三十首」中の右の一首のみに止るのであでは詠風を云々することは危険ではあるが、現在のところ光信の和的教養の深さを物語っているとは云えないであろうか。ただ、一首難い。しかし反面、光信が和歌に精通していたとも考えられ、文学、関しても想いを自由に巡らし深い情趣を盛り込んだ詠作とも云いに関しても想いを自由に巡らし深い情趣を盛り込んだ詠作とも云いに関しても想いを自由に巡らし深い情趣を盛り込んだ詠作とも云いに関しても想いを自由に巡らしていては古歌に添い、内容

活動が延徳三年にはすでに始まっていたことをも物語る。 る。「人麿像新図供養三十首」の記録は、光信と公卿たちとの文芸 に当る延徳三年(一四九一)に和歌詠作の記録が見出されたのであ に出席の跡が伺える。そして今回、通算約六十年の連歌活動の中程 五二五)の永正から大永にかけては、公卿たちに混って月次連歌会 ちとの連歌会での活躍、永正一○年(一五一三)から大永五年(一 一)までの約三十六年間は宗匠である宗祇等を中心とする連歌師た文献上、土佐光信は寛正六年(一四六五)から永正四年(一五一文献上、土佐光信は寛正六年(一四六五)から永正四年(一五一

ばならない重要な項目といえよう。 後期歌書目稿に、また土佐派研究として土佐光信年譜に記録されね に陽明文庫蔵「三十首」は、ともに和歌・連歌研究資料として室町 になる大阪天満宮蔵大永五年九月二十一日の連歌会の記録、ならび 光信の文芸活動期間を大幅に延長させ、没年時を更新させること

- (1) 吉田友之氏編著『日本絵巻物全集5』「土佐光信――京中新図の屏 風一双――」(昭和五四・八 集英社)「七十一番職人歌合」(東京国立 雅信 模」とあり、当歌合絵を光信筆と記された遺品は多い。 博物館蔵)の奥書に「職人尽絵三巻・土佐光信筆・弘化三年午秋日 法眼博物館蔵)の奥書に「職人尽絵三巻・土佐光信筆・弘化三年午秋日 法即
- (2) 注(1)に同じ、「土佐光信――土佐派の転機-
- (3) 谷信一氏著『室町時代美術史論』「土佐光信」(昭和一八・四 東
- (4) 寛正六年十二月十四日何船百韻(広島大学国文学研究室蔵)に光信 の二句あり(江藤保定氏著『宗祇の研究』――資料編宗祇百韻・千句連

- (5)大永五年九月二十一日何人百韻(大阪天満宮蔵
- 6 藤原敦光「柿本影供記」(群書類従巻第二八三第一六輯)
- (7) 山田昭全氏稿「柿本人麿影供の成立と展開——仏教と文学との接触 に視点を置いて――」(「大正大学研究紀要』第五一輯 昭四一・三)
- 9 8 吉田友之氏編著『日本絵巻物全集5』――土佐年譜 注(7)に同じ

(昭五四・八

集英社)

- (1) 土佐光信が刑部大輔に補任したのは明応五年(一四九六)一二月で の写しであることが判る。 ある。宗祇庵での人麿新図供養が行われた延徳三年(一四九一)三月二 一日にはまだ刑部少輔である。従って当記録は延徳三年三月二一日以降
- 国五十七・正三位冷泉政為四十七 月日民部卿・正三位姉小路基綱五十 日叙正二位・正三位三条西実隆三十七 侍従・権中納言正二位滋野井教 一」とある。 「公卿補任」延徳三年の項には「従二位松木宗綱四十七
- このうたはある人のいはく、かきのもとの人まろがうた也 ほのぼのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく舟をしぞ思ふ (古今和

このでした。 よしゑやし浦は無くとも よしゑやし潟は一に云無くとも 石見の海角の浦廻を「浦なしと人こそ見らめ「瀉なしと 一にいる 人こそ 柿本朝臣人麿、石見国より妻に別れて上り来る時の歌二首并に短歌

たごの浦の底さへ匂ふ藤浪をかざしてゆかむ見ぬ人のため たごの浦の花をみ侍りて 柿本人麿

このごろのあかつき露に我が宿の萩の下葉は色づきにけり (拾遺和歌

春のあした吉野の桜は人丸が目には雲かとのみなむ覚えける (古今和

45

- 一法現出版 『増訂古画備考』三三――土佐派・土佐光信朝臣(明治三八・一一
- 哲学書院) 『扶桑名画伝』巻二三 一四位 刑部大輔 光信朝臣 (明治三二・二
- (15) 本稿土佐光信和歌・連歌活動一覧表参照。
- (16)(17)(18)(19)(20)(21)(22)(23)(24)(25)(26)(27) 注(15)に同じ。
- (28) 本稿執筆にあたり、『二水記』永正一六・四・二五、同一七・七・二 により、内閣文庫所蔵・鷲尾隆康自筆本コピーを閲覧させていただいた。 五の条は鶴崎裕雄氏・湯川敏治氏(中世公家日記研究会会員)のご厚意
- 『地下家伝』二十(日本古典文学全集の内) 『日本美術画家詳伝』他――土佐光信(大正七・九 日本美術鑑賞
- 注(3)に同じ。
- 廿一日の連歌記録(九を五、廿一を廿と誤読された写本の存在も考えら れる)をもって記した可能性もあろう。 川崎千虎の大永五年五月廿日(思ひよる日)没説は、大永五年九月
- (33) 注(30)に同じ。

氏、大阪天満宮・大町文生氏に対し心より深謝申しあげます。 小稿執筆にあたって、資料面でお世話になりました 陽明文庫・名和修

本学研究生——

### 徳川黎明会叢書 全十三冊

文学関係の資料を複製して出版。大半の資料が、今回初めて公開 されることになった貴重な内容である。 尾張徳川家に伝来した、未公開資料四十万点余から精選した国

筆手鑑篇 「逢左・霜のふり葉・八雲」、 四 古筆手鑑篇「藁叢・桃江・文車」など。年四回配本。 三 和歌篇 「古今和歌

和歌篇「私歌集・歌合」 (第一回配本中)。以下、二 古

最後に和歌索引を別冊にする。

文閣出版 徳川義宜・久保木哲夫・杉谷寿郎・伊井春樹篇。 一冊平均定価 111000円)

(A5版

思

## 近松全集 全十七巻

貴子・山根為雄・横山正)編。 信多純一・土田衛・鳥越文蔵・長友千代治・丸西美千男・安田富 十七巻 資料篇(現在までに、第一巻・第四巻が刊行) 共に、曲節・表記等も考慮して写真版を併せ掲出する。 版。最善本を底本とし、厳密なる校訂によって作成された本文と 冊八○○○門~一二○○○門: 近松全集刊行会(秋本鈴史・井口洋・内山美樹子・大橋正叔 第一巻~十三巻 浄瑠璃篇、第十四巻~十六巻 歌舞伎篇、第 二十余年の準備期間を経て、刊行が開始された近松全集の決定 (菊版 岩波書店 予定定価